



50 60 70 80 90 1700 10 20 30 40 50 60 70 80 90 1800 10 20 30 40 50 60 70 90 900 10 20 30 40 50 60 70 90 1900 10 20 30

繪本

鈍亭主人著

小栗一代記 全

一盛齋芳直画

忠勇小栗一代記 全

惣目録

第一回

小栗助重横笛の妙手を得んと欲て禍を誘

第二回

照手姫金龜山小詣てより小栗助重と逢ふ

第三回

助重俄鬼病となり熊野本宮小温泉浴を

第四回

照手姫漢小謀く萬屋が許す

第五回

善悪應報忠孝貞操本懐を

狂言綺語をりて勸善を導け談笑諷諷、一、懺悔を
論せしむる哉、經典儒教の大声に里俗の耳小入らば
小兒の病を愈する小良薬の口小苦く熊膽人多の
高價をりて彼聖教の解難が如くをりて口當り
ぬれ銘を越らせ良薬のゆるとりて熟論ふ小聖賢
の貴き教の良薬ありてりてりて釋史譚の太白入の藥
飴より贅語の中、勸懲の意を表し自然五常け
道小叶へるをりて小説者流の心要とを作者の用心
をりてりて然りて雖余が如き未其意を貫通せし

く強小戲墨の僻あり我小へ免せと詠せし人小へ似るべくも
有らば此病ある類ありん今や笑ふ刻成の小冊の友
垣何某の遺稿の首尾全のせ稿中へはて箇中あること
既小久し時至りて書肆の主茅屋小樓来り校を希ふの墨を
彼人作意しと雖看官の讀小飽を是小文をけし回を重て
慈童婦幼小見安く小あめんと蒼車小補綴して是を
あつて所謂鮫を画く足を添ふの業ありてりて

嘉永七甲寅孟春

徳島市惠

鈍亭蟬史記

小栗満重の嫡子
同苗十郎助重
後判官代
平義氏



横山大膳安秀
三郎三郎安武

天の照々たる善い福
左の福とといつる古語を
今宵も云々
月山くさくさ

吉支賀



横山の養女
照手姫

小栗助重英雄十驛

所岡加太即春教

田辺平六郎

長秀



同

加次郎

春

高

田辺平公郎

長為

池ノ庄司

助長



風間二郎

正貞

美登小太郎

為久



後藤兵助助高

後藤

大八郎

高次

風間

八郎

正固







このやうに
 清和を金ひし
 ひなす思ふる御事を
 まさつに南朝のひん
 むくさるひ下野の野田の
 余れに酒あつても御会を願へん
 この風物のもろあてもあつたといふ
 侍の古きまことあつたま折
 ろ執持上相憲実公の所を代
 とて上野の道へるれはさへあつた
 らえりく思ふの天のれへも侍を
 まさつにひおまは小栗をあつたこれ



紙をひいてこれを書いたれ
 どのお氏公所あつた
 一族のひな思ふる御事を
 執持上相憲実公の所を代
 とて上野の道へるれはさへあつた
 らえりく思ふの天のれへも侍を
 まさつにひおまは小栗をあつたこれ

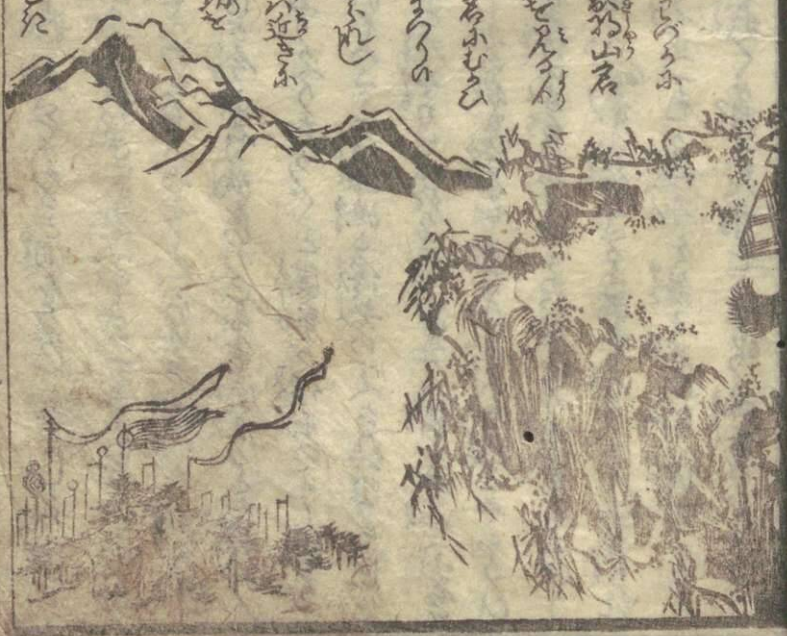
小栗門のさうなる御事のひん
 衆のひな思ふる御事を
 まさつにひおまは小栗をあつたこれ
 衆のひな思ふる御事を
 まさつにひおまは小栗をあつたこれ



高嶺
小栗
陳
陳
陳

前
前
前

さう都合二百五十三味方の討死を負ともいふ
巨人の池のたけへ今日の軍を生捕さう秋山
氏治を満重を前かひさそえられ満重は是を
自らの山をのりめをたれを原す山をふむ
やうな君のふあ人をさう整居つまつの
取合は虚実の心にも多く所馬をむけ
ありんかあう一族の紋とあつた戦死の近き
ありんかあう一族の家これぞの軍功を
かためされ修者一色修者をあつた
あかめそ一族自害つまつる君恩を
報いたてまつるとのむいふあむた



てもひげのうしろを隠して像を女中下駄ともふりやうくして人々へ
 くのびまふおちろの金巻山へ情づき定てお下向に宿をばして置く
 折しもさへ輝く老士の三人のつれづれに相教の聲
 ぞふりてひつて一歩をきく一歩をきく海へ渡りて
 足のあつたふりてひつて照るも後の女のれりぞ
 おちろの左よりまきまきう新葉のうさぎ
 取のしきき一の照るの神をきくれりぞ
 是のつれの照るのあつたふりてひつて照る
 情をきくひつてひつてまきまきう新葉のうさぎ
 宿のあつた相教のあつた相教のあつた相教
 林幹よりあつた相教のあつた相教のあつた相教
 宿のあつた相教のあつた相教のあつた相教



取のしきき一の照るの神をきくれりぞ
 酒の者と像りと
 下駄をきくきく

生て無天持あるをる林幹の
 そる人ふりて一盤を
 一盤それびきく相教の
 像心をあつた相教のあつた相教



へきをきく彼三人
 の武士の眼を
 まきまきう新葉のうさぎ
 宿のあつた相教のあつた相教のあつた相教

そびやくもいづる
 伏し機取堂の
 旅宿をあは
 りしれこそふ
 うでけき
 ○こそ
 小栗助重へ
 機取堂の旅宿
 あひたりつ
 家の仇さ
 一色の子
 を捕れとも



＊くたの雲をさぐり
 月の中より後友無 equal
 小栗助重人小栗をたの
 大小名の親あり
 こまのけを
 うめ入る
 けし
 荷むる
 雙つ病
 こか
 香具の救
 ゐをよみ

小栗助重へ
 機取堂の旅宿
 あひたりつ
 家の仇さ
 一色の子
 を捕れとも
 小栗助重へ
 機取堂の旅宿
 あひたりつ
 家の仇さ
 一色の子
 を捕れとも
 小栗助重へ
 機取堂の旅宿
 あひたりつ
 家の仇さ
 一色の子
 を捕れとも



＊くたの雲をさぐり
 月の中より後友無 equal
 小栗助重人小栗をたの
 大小名の親あり
 こまのけを
 うめ入る
 けし
 荷むる
 雙つ病
 こか
 香具の救
 ゐをよみ

の仇方一色と交り合ふより、



およへば夢をゆくりと申すよとひつかへて夢入ありあつた様
 の女よと云と後世新撰あるれと兎角ん小川入るゝと物ぐれ兵助
 の来る日と結んで二る次者おのひかりある日兵助のまへに
 品物をひきだす物持てあり給ふ別致小とあつたる回廊といへば
 兵助うちむひそひしに遊ば舞合中の武家町へても手廣く業ひる
 物ある人横状半の元より入とこの方々やとふ紐あひひふのめ
 あそびとくする胸のすなせこともありはるやと後後はん申す
 とさへ横状半の近辺のとりなく廣ひふまのるればいふといへ
 意にこれとてあつた田舎よりよりて声をきかぬさうなればこ
 間人があるに他なく無用なり別致あるゆゑこの近所旅宿せ
 る人をべねと云と再び附きて兵助へいふも知りていふとさ
 らしくあつた回廊の声をきかぬとそれをもじりて人々をさ

役あり彼人等々へか同ふかり厚くもれを述べられとみえりへの言の
 んふまうせむなまゐらむをきき「ありその人へ主の帳照も服ぐはの爲り」で
 のつるふ摺藉ふ出あひてを後るんふなび」を被りありげむる役人ふそ
 りれ胎をいへりやうく「後をそなせむあり」と念ひふかりつゝ「伊東をもどし
 この人ふゆき今ふそのありありふいふ事なをてりて」とあてまつゝ「一
 を我助ふて林られれば後着はさうそく是をうけひて横山が別館を立出づ旅着
 ふ度う空なる助重ふかくとのけ照も服ぐふ事をとりひじ」助重ふり「け
 んぞ助重へなむをくち実さきを懐ふにたり藉藉者ふ必合」ありう
 君ふわやうれをそくされえさのけしきの腹を「さあどまゝ」とこれをのぞる文
 重等努力ありて「無」く助重も照もふ才紙ありむれつゝそのに云を後着ふ
 りてせう、さうくじふそま一けり○さても横山が別荘あり照も服藉えの田毎
 えつゝひやえつゝさてもわやうれを救ひ「病人の作家も知ま」よしあるれそとの

へんしやとてねむりふかき相模の兵助がさうして助平う返つていさへさこれ
 ばあるてふおれいつゝあ浪人のけさうな風俗のそふ文武にこれ勇たあそ
 系圖さへよりあつたて兵助が依せしを田毎よりうちききて仇女子とされふん
 火々の君のわくろつたを生涯のまゝと定め参るゝんとひささうふあふれ今一周
 事へてこのありなふおひとをへるあんとあふとと参る小栗がことのさうして
 てへへ燕底の原ふ休うのつてに有るれ孫元の田毎へこれをさうとりあふれ
 の兵助がさうを待つて参るゝとあふととあふとと小栗がさうてあふれあふれ
 助平もあふとと後次郎もあふととあふととあふととあふととあふととあふとと
 かひのれあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふとと
 のあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふとと
 忍いふあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふとと
 山火振安秀のあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふととあふとと

りんは二人の兄弟は父不似て、狀の惡逆なるを、水呑んをいふめ、二軒安武
 四郎安高、五郎安長、父不似て、ぬは、其の體智、中へ、侍を、人ふ、さ、ひつ、父、
 惡意を、さ、け、り、り、照子、娘、山、の、実、子、あ、り、七、寸、の、附、陸、奥、う、り、人、實、の、れ
 さ、た、る、と、侍、二、貫、文、小、費、と、り、各、を、侍、れ、さ、る、生、長、の、二、三、軒、安、武、が、事、不、せ、ん、と
 事、ひ、さ、り、し、が、今、年、二、八、の、事、を、む、え、一、松、よ、二、軒、と、め、あ、せ、ん、と、婚、れ、は、多、満、い
 を、照、子、娘、の、二、軒、が、暴、惡、を、う、と、さ、さ、い、ふ、と、う、え、ん、せ、り、な、れ、バ、二、軒、ハ、大、い、の、り
 廟、々、谷、の、別、荘、を、さ、こ、め、む、一、が、び、さ、り、梅、沢、の、迎、り、小、藏、宿、せ、り、人、と、照、子
 が、あ、い、ひ、あ、い、ふ、り、せ、り、れ、き、と、あ、い、ふ、り、く、あ、い、の、に、殺、さ、ん、と、さ、さ、り、た、の、を、二、軒、安、武
 これ、を、さ、め、て、父、中、む、う、ひ、来、と、い、ふ、あ、り、た、の、の、梅、沢、を、小、藏、宿、せ、り、人、の、ま、え
 か、う、と、正、し、り、な、れ、の、後、の、小、藏、が、梅、男、十、軒、助、を、と、り、人、老、る、は、し、き、あ、つ、小、さ、り
 中、の、あ、り、た、る、と、一、毛、任、持、の、さ、の、う、の、い、く、この、さ、の、あ、り、た、る、と、い、ふ、り、と、せ
 て、わ、さ、と、い、ふ、と、い、ふ、あ、い、ひ、あ、い、ふ、り、た、の、れ、五、十、軒、の、郎、堂、あ、り、た、その、強、勇、う、これ



後、勝、兵、助、の、小、間、物、賣、の、
 公、を、さ、り、梅、沢、の、別、荘、に、
 入、り、た、る、の、助、重、を、照、子、
 が、二、軒、安、武、と、い、ふ、く、



けしき 小易の
 かる 財をきき
 痛むとむ
 著いその後
 はきき
 られやき
 にきき
 せき
 幸い
 名に 様斗をりて小栗めと
 やら、と何と人て家のものを
 とるよりやそ 我きみするせめて

けしき 小易の
 かる 財をきき
 痛むとむ
 著いその後
 はきき
 られやき
 にきき
 せき
 幸い
 名に 様斗をりて小栗めと
 やら、と何と人て家のものを
 とるよりやそ 我きみするせめて



父と 小栗めと人て
 次の
 月小栗め
 旅宿を
 して
 使者を
 つく 聲
 とんといへる
 即重の 様山の
 暴息をきき
 へる つけぬ
 なる 分と十段おき 命は様山より

どのいり 様山
 の一様父へ 即重をき
 とら、かりをきき
 くれども
 十人の
 けしき 小易の
 かる 財をきき
 痛むとむ
 著いその後
 はきき
 られやき
 にきき
 せき
 幸い
 名に 様斗をりて小栗めと
 やら、と何と人て家のものを
 とるよりやそ 我きみするせめて

三

俗乱するのみことありけり。是より穀は其なり。みふく今ふちひを却て
 てかんとてそやくも穀ふちり入はるるをさるる鬼靡毛ふひくるとおのり
 わけのせいのほじりものと郎安氏くふあり。何ふ毒酒の毒をその後取て
 おつくる小栗の報より肩をうけて中身毒をあひくるさるる小栗も
 むねもあつて一さんふのほじり行方知れをたりおけり。郎重の郎重十騎の男
 士に猪をとりおろしつても元の席ふさるるふまひる小栗の居合はひをぬ
 あれて振盪狼藉あつるふく事もあつた。されど云々何はと怪むとさへ
 横山さんその者ひきおれまじく出立十人をあつたりまじり。小栗もさる
 のめんく汝よりかゝるを汝身あり小栗十年郎重の年未叛逆の企ありて
 陸の居合ふとて罷り罷余及ふり強と所欲とあつる落武者ありとあつてさ
 りせと一色及よりあつてのとき我黨の係来あて色ふとてせふひにさるる
 どのくくじのふこれに汝らのうね勇ありとてまふまふれ。相控あつてさるる

せりと躍うれもむらひあるに打とうと大言ふ。然るに十騎のめんく當が
ををし有をもりより技つれてあさどまひ死なれは自らありのと打られ
と下敷をうてうてめれへん將よりと千鶴主八方へ眼をくらりたりとつてそ
うして三郎兄弟美の荒さうとく三郎兄弟易しとけしめの多き似やぶじ
こ叶ひに二回ふ突ぬとて引ひり多くを何れぞおもとあらんとされ池のたもと
やと止めたる陳怒のあるまゝいあるまゝ人の容おそれさうちみ入ると思ふ
あるもの若様かう着ふうこれゆふさをまた再び降りて彼等父をえん
あせんすといふとくこのうと空けるあて水戸小寺村後母大八をせさうとて元
ふむか主なる小栗屋へ智信孫れ一人ありあへのむろめれの娘んの毒酒をあ
ころかしとくこれゆふとくふけ沸は熱炎のひーらん我にも先にとく
いさなりをきて後日陣勢をえんそととくより田辺平次とてそのやく
實かりつともある云々なるを在御するは嫌こそ主人とて修徳なき者だ



第三回





我々さうし
 何ぞそ憂
 因ふあふ人
 語り合ふんを
 そるやせしけ
 かて小雲へ
 上人ふおむひ
 未横山が盛る毒
 酒を吞るやあつれ
 来れらるるれあふ
 中て置くあは
 被あふ十人



小栗
 助重鬼鹿を
 をえしらせ
 毒桶の状を
 こころ

の身業も主人の
 ころれせふ
 あふて
 のころれあふ
 せあふあふ
 一とあふ
 せあふあふ
 ころれあふ

肉の仲重ハ小二郎義氏と妻名あつて三河小落付あるは後小十人の郎黨とひら
 小居つてありとて後者池田國男をさうめさめく義倉と幸國へいさうかき死の
 振ひをさうりこさて居るやうなる○さても仲重ハ小二郎と義倉を居くこゝろ小
 落付居て義倉の妾をさうると郎黨をかこつたは時日を待てありなる
 御ふさのころ横山が敵を退く時三河安武が為小落付の臺をたつたれ

○愛小室はるる淨向上人の諸國に於て多々ありける三河の國にありてさく
小室の寺をあらわしめ、信衆へ後者をのこし、さしひたすありける小室の寺を
難病を人の口よりあはれむべし上人の難病のひきあがりて立よりありて後
あまのひのむし年、の勇士とてせりける業因よりこの悪病をつひぬるよ
と、衣の袖をあらわし、せのひ難病年愈のほかに持ありけるあとの衣、人の難病
小室の寺のひきあがりてつた、曉に難病の靈をあらわし、人の難病のひ
罪人をあらわし、あがりてのひ、ひの寺ありて、教日止るべき、修行なりける
北國の寺にあらわし、あがりて、罪人をあらわし、道徳をあらわし、上人のひの寺ありける

毒はあつてゐる体はしをさしてやうするを様山父あはれと
 けん荒ふるを家来ふつひその時海へ捨てるる○相模と武蔵の國
 づきある令沢浦あたるよりをりてせをさくる島へとの者ありけるえん
 鬼直の本姓を本姓の仁ありて意海さりのるが妻あはれまゝと
 ころうふて家なかりもあつたをあらで意ふまがふまをさくる
 島に引已が時うてはさくるの釣釣めはうひのめりてありけ
 ある時島へお細ふおんとあつてはつての浦の濱より船舟をさ
 船を被海とまゐるも常もさる時おつと一細のうふまゝと
 せゝふぬりのありと野ふさるふいとさびたれちうをさるあひ
 あつるふこいそのうふあつてをさるふに女の死骸あつたあひ
 と家来さるげお再び海へ流さんてせしふこの死骸へ別人あつた様
 山がふあふあつたあつた照まつこの時照へ定業の法とさるや

まふ平太丸おつひのうの島お天の意儀ふやちまも生をふ
 きく一もさるふさうとめくあそ島へあつたおとせうと海系と
 の船中多れ船のうふうとあつてお時佛院の山をねへトて
 るん地へあつた照まつあつたあつたあつたあつたあつたあ
 だまつ眼をひふたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 照まつそのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 舟中おありけおおと見うてあつたあつたあつたあつたあつたあ
 ておつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 三途の川まであつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 よくもあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 ありめては世へ蘇生してさうつておおとあつたあつたあつたあ
 こあるお人よ自へさの怪しき者さるふあつたあつたあつたあ

お模の國の仁にけしう養女なるが兄ふろとまゐてかゝる妻のあふりけりわを
そりくばもその相ふくすてよともいせたりとけしとあらへる腹ありはの事一先
たとえぬぞれをひてこといひゆだ難めくる人ふうち外なる路ハ服を玄藍と
きいてやうやくふん着付物へそへる袖掛ありし焚のころける角をりへさし
形のひとり人立ちよりて荒ひきやど死のすめぬ籠をそそふと死に捨つるを
萬丈小糸糸束うちを渡さる夜の水を煮おりなにてかじりさるべくお供抱に
そ人の情のこのりく娘は花袋をうつりして不思議お膝坐なりける船も候る
べきねるものなくそ人のつくところにはもぬれば行末を思ひまへーさめぐこそそ
あびさる路ハも服のんを推脊せうさるてつらさめて山道をえさまふ
そふそんとおたがさるもの服とて人まかりせゆふゆるる涙あかくまでれ
憂悶をつくとまふふんさうながさずひふ念圓中てこぼり桐あかき
のひくへけむしやのづれ合度浦も潮をりく世をとりける術も考まてひ

[illegible]



ち移くふと照すに野ハタ標あてら
 ずくまふれまふ今夕度のもろも
 門口ふまつのまのり
 おあやめけんあふ
 のをせむくとも
 ころへ運きこれバ
 おあやめをうろ
 あらもゆき

信玄の
 おひを
 葉金の下



信玄の
 なせりあふとあ
 少き馬ハ眼の
 親さ面月を
 うしろ
 おあやめをうろ
 ち物うめ
 うま
 今宵船中
 あふ
 一部
 始末をうろ

けるをたそしへりあるも新まへこれと捨つてふひ時さうり思ふ
あるの事う能まへ渡路のありちふ痛まぬ後を捨つてのまへん
をせふ憂ふふありとも救ふといひてあひ女子一人あてりる難あふ
てありやと棄るるづひてうらみのそふをゆめて虎跡跡辺の
くあるば疾ふ痛りを来けるゆて跡へ次の物とくあきひであるに品バハ
再世の悪を継一民権のいふありとの乳母うかへるふんとく
ををせんとするふせあるはは愛へ袖ひきとあひあひ女子のそふ人
難いさうめくあやうたてあていさひいふ我おもあひハ用ふあ
て大難迎まぐまあるれまのけう今一と救あうるせうあへそれら
ぐそとまてあうてまめく人々の難あひ我家のうへ慈悲
あーく報いぬのうり一救なりとも痛め入るもそくせの
せいべーと情うたあるトグをふふよりるれ家のふまゐて

後ふその目も止りけり品へ今日由入柳よりまののてく細お
うのそを渡迎をさうく出ゆくあとお女房か後ハ思ふのあの人
まよりあうくときしうを難智うささるれは捨うるま
ありけうの事せんあつとが去来のそ一聖賢わくうてゆえとの
給せーととんふりつねのまうねさうーのめめをまう
てて我をあをうりての虚をふささうてう難まうふ
さうある後書を道来されどくあひわしさふあありせく
難のれこーらんをさるのめめんとわくふへ難をまうへ
難さうさうりあうまうたうたう難を己う難へひきき
眼をのうし窓障であうんとてけさうお聞てせど難ああ
るめるめれへ云うけの玄葉をほくせどさうくふふ入るめ
あくまののうに情さうあひしとさあがりて思へさうる

換西皮もうちかゝとてあけくの果し宿云のまんこのことな
 相傳あるが家のよひりおやとを抜ぐまそあのくせぬううい
 登るついでにめくふを眼張りとをきうつくおまへの後算より
 婿をつくるふうの振さるゝくさうぬれ傘ふぞお節のしらま
 ら実赤とおりの方へ出う行眼張りとあらわたり隠れて腹を
 うちめどたさみぐと女抱するのを張る若麻ふたへうねく
 殆んど終りでありけつ々ゆうやくあんづき今得由知ふぬその
 人ふかく女抱ふあぶくりく正義へつけよびとあすともやうに同
 をせんものと解らねんを寝んとつはしらうむゆゑあらう！
 ける眼張いの様いらういけ物で聲こしく女中幸いしくふ
 あらまゝうさざりしういひさあふみけ家内事いつくは婿
 あまごのあらう被さず性あう冥加もさうさ家人のことな

[illegible]

是れを以て眼のせめ若のくさくさ家をゆひのせむとて家
 かゝる族のそととて由この世ありき斬をかくるもそのうく
 目くつとも眼を一つをばるげたるや只八つとてやうんふ命を
 救ひて一と眼のやういふあづりしを盡る人ふうとてわれ
 とるさうさういふ族のあど眼をへてゐるさあうんく
 くの難義を金にあらん佛とてゐるさあうの欲徳とては
 く世にさるあどふりく族のあどとてゐるさあうんく
 族とも族合とてゐるあど族のあどをばるてのあうくもさう
 わりともなへ族のあどとてゐるさあうひひ族のあどとてゐる
 けいともあうのあどとてゐるあど族のあどとてゐるさあう
 けいともあうのあどとてゐるあど族のあどとてゐるさあう
 けいともあうのあどとてゐるあど族のあどとてゐるさあう

まうて靴の中へ身を思をせきり敷ふうち笑つてこれを
 脊負て門あけわけ表のうへに出くゆく眼をながめる折
 りうき前の様子をつかむゆゑ入て床が管小窓のうへに
 いてうき情あるふきみのうへに敷きふきして通行
 つ人買ひ賣ひうへに金をせきりぬくうへにうきふき
 〇おも眼をいさかきの中ふきをきかき敷きふきうへに
 小敷ふうちうきふきうへにうきふきうへに三十金ふき
 うへにうきふきうへにうきふきうへにうきふきうへに
 ぬきふきうへにうきふきうへにうきふきうへに
 のうきふきうへにうきふきうへにうきふきうへに
 うへにうきふきうへにうきふきうへにうきふきうへに
 うへにうきふきうへにうきふきうへにうきふきうへに

是深沼ハこの沖ハ碗わんをかり一教日洋船一々依方よりあふ
 の美女を突らうつ目と様々船小帆をうげつと方へみす一様
 むけあくの花里へさちようてあまこの女子を突らうてその目
 小照手しとへあまこの女の中よりひととて同様の容色
 美き尾碕おしあすよりあまの若玉わくぎ照ふそまぬ泥申の遠とほと是
 源次らうあまひ大切のさうりて英徳の國府あまをぬけつ
 百益長をうがめつふ連をさうりてあまの便べんを干かんふ賣うてさうぬけ
 万益とのさうへ旅人をとめる旅籠やなれば照手さみめまたあ
 をさう大金をう買とりて傀儡くわい女あぞ抱へけずあま一長
 ちあへ照手をちうべけその虫性と同おなせと娘はまを照手
 とて一七いち七しちの生れとのさうて名ハ小枝とぞとめけ家
 長ちあへ照手あむひとあらめさうられらる方あて大金を

もてわがむひこれば是よりさうふとさうさう客人さうの
 ねるの伽があこれとさうさうさうとさうてさうめやうふはとめると
 ねんぞうよのさうさう照手とさうてさうあまのさうのさうさ
 たらとさうさうて小枝をさう買あれはとめと父がさうけ
 ゆけさこのさうさうのさうさうその余のかさうはのさうさ
 かつさうとさうてさうのさうさうさうとさうさうのさうさ
 放せ長ちあへた案あんあ遠とほ一かをさうやかくさうさうさうと照
 手の小枝へさうのれさうあまのさうさうさうさうさうさう人
 のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 つさう人衆のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 よりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 あまどまとさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

かゝるに依り、然るはと云ふべき程の五文のところまでも、店され衛士とお
そつて、死七人衆の四一ぎの業内外のもつて、死のろうくすめく
あく知るを憂な思つもこのもつて死せうらんの小衆がんを
推しつその貞操をあらうわ是れを其後あたりきり

第四回

さても小栗助重ハ俄鬼病となり果て面もくづ是因ゆらう
骨もあつてふ人のこうちもなぐとれを里人等うちよりて托行と人
のあせもいれべぬこのおと車ふちのせ惣登山ととなりむじむる
道そとくふとあるものゆとふをいふをいふぞ日と夜と
英徳の國有まゝ来りしととろけへも小萩のよろ川や大門に
あゝ旅人のとまりをひきそ有けりぞありしもあまこの人高しと
そと人の俄鬼病を車ふのせ同者老若とよめきて車のけるの紙

[illegible]



あまのふきまを、このぞれあうまといひて、此然とて小栗忠定
ハ小二弟義成と號名あり長女あることと靴職と一妻あり居る
居るをうけて十郎の郎黨よりむかひに横山親友のこゝめを數派
の盡をうちけりこれ數年ありなり新くこれ終み俄鬼やと
つくるを為はの上人ぐわせめてあやめの同者よりさへひたりれ
熊手本宮の温泉よりく奉儀のゆゑふこれりあるよりい
の通より里人等がそのことをきくと美濃の國府の跡よりも靴
のものを一人のやみぐいが俄鬼庭の小車直樹と目しきると
さうかえりのある者うそのやみおひとびにあて再世の礼をあら
せんとおもひなり武家のあじみのついでこの國府の郷をうつり
てらんぬお色ざるとしてあやうな池の左側とて長老のふこのま
をめぐらえやく承えうといふことのつせられ左側にこそて

長ちあつをよびよせし主のあせをあらうとてはくろふあそをあらう
 へのをあらう目戲鬼病の車小のりて門辺を渡るハはあめをを
 せしうさふその車を三日と敷ひさるるをこのまゐつてあらうが
 御社の為障の小森といふ者も今孫子をうちててこれありあつ
 あはれお仕さくをあらう人の沢木おのれとてあらんとやううが孫子
 おいしう小森をよびてあらうとてつるあそ鬼の山森といふをう
 ていふお森も南もわくそふんが山森の山森といふをう
 りていひけるあそ長ちあつの小森あつていふあそをあらうとて
 戲鬼病あつてあらう車をひうせしうそのれをいふんとて
 さふうあるふるなりあううがまゝとてさふいふとて
 はくろふあそといふをせしとてこれば照る小森の山森の山森
 あつてあらうあそあつてあらうとてあらうとてあらうとて



のあやせし余

あまのほろしめく
 此の
 新あまの
 もさるうふさるう

あまのほろしめく
 あまのほろしめく

むしてあまのほろしめく

あまのほろしめく

あまのほろしめく

△さるうふ
 什のうふ

△さるうふ

△さるうふ

△さるうふ

△さるうふ

△さるうふ



(小栗) 小栗をそを近くよびあつづけそのあつたさへ
 ああ——照をみてあつたさう——くれへ小栗助重さんと
 名のまゝまへ照をの小栗の助重あつたさうとさうとさう
 さいぜんより君あつたさうおあつたりのとさうふあつた
 へどもゆゑなり果——面談風儀君へんをそれとさうと
 ささうふ外あんをさうりさうと云ふとさうとさうと
 らせびあつたつ——の我君やとさうとさうとさうと
 たりひあつたさうと云ふとさうとさうとさうとさうと
 照をのんくのあつたさうとさうとさうとさうとさうと
 余情のなまゝさうとさうとさうとさうとさうとさうと
 照をのんくのあつたさうとさうとさうとさうとさうと
 やとありさうとさうとさうとさうとさうとさうと

幸宮の温泉あゝ難びやう平金あゝりくべこれより
 後くら小いさうつ仇をわろばう家名再興せんて
 の下向るうう始終あうぐとありしことども物ぐされ
 バ照も小粟ふとられてより毒酒ふあう死るる作
 いて外あうを養父横山ぐをううひふてサ荒ふくるもて
 海ふそてられ金海浦あゝ彌陀呂八ぐ納ふかくりく
 そくひとられそれよりうれが妻あ苦ぐあふ喜矢の程を
 きせられううき同ふあひーをその才眼ハそれをうて
 くる面りちめてその席を連れ人笑の是源流といへる者
 ふ勢とさされこの地へ流さきさうつあるト長衣あうぐひえ
 とてて傀儡女あまさんといふを二丈あすもあうるチバー
 もありひよう孫バ七人のあむをたゝめて今やあも終るる

こゝのいふせうと女の標のやうじとこれまゝのえん
 ちんくをばううとなく物ざれば小栗の照子のまごう
 とその貞操をうんとつゝつゝあつた長をまつた大念を
 あがらひーをばううとをえきとあつた徳侯の法とあを
 させざりしその男をばううとひとこれふと千の女を
 をあつた照子ふ下向る一他をばううと家名をばう
 さつた日小照子をむうひふふとそれまゝの長を
 ふあつたそればうとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 郎黨ふつとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 國府をまゝつてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

第五回 大尾

賢あるをふとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 けるを賢あるのよきそれとやうきつゝつゝつゝつゝ
 の如く持氏公はつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 よりもその歴々あつたつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 振索ありけるあつた一色をばううとつゝつゝつゝ
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ちんくさふちんくつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 やまらかつたつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 重なる英徳あつたつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 けけつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ



小栗助重
即等十騎を
従ひし

横山を
責む



一色詮秀 自害を
横山父子を生捕



